若手研究者奨励賞 2026　受賞者と講評

受賞者１：津川 修一（龍谷大学経済学部 准教授）

https://researchmap.jp/stsugawa

津川 修一氏は、公共経済理論を専門とする気鋭の財政学者である。2018 年にトゥールーズ経済学院 より博士（経済学）を取得し、その後、多数の査読付き論文を発表してきている。津川 修一氏の研究成果としては、メカニズムデザイン問題において、designer と呼ばれる計画者がゲームの参加者となる場合の分析（Review of Economic Design, 2021 年)、羨望の減少という非厚生主義的な社会選択原理に基づいた所得税と公共財供給の研究（The B.E. Journal of Economic Analysis & Policy, 2019 年など)、従量税と従価税が等価にならないケースの考察（Theoretical Economics Letter, 2017 年）などがあげられる。このように、メカニズムデザインや非厚生主義的な社会原理を考慮した場合の公共政策の在り方を提示し、公共経済学分野で世界レベルの新たな研究の方向性を開く研究であるとして高く評価されている。以上の理由により、選考委員会は同氏を若手研究者奨励賞の受賞者として全会一致で決定した。

受賞者２：掛貝祐太氏(茨城大学人文社会科学部 准教授)

https://researchmap.jp/y.kakegai

掛貝祐太氏は、スイスおよび日本の財政民主主義を専門とする気鋭の財政学者である。2021 年に慶應義塾大学より博士（経済学）を取得し、その前後を通じて学会誌を中心に多数の査読付き論文を発表してきた。2018 年には日本地方財政学会佐藤賞(論文の部)を受賞。さらに 2025 年公刊の著作『財政民主主義の地平～スイスの自治・多様性・直接民主主義』(有斐閣）は、7 本の書評・インタビューが掲載されるなど学会・論壇に大きな影響を与え、公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所が主催する第 51 回藤田賞（奨励賞）の栄誉に浴した。掛貝氏の研究成果は、従来の議会主義的枠組みにとどまっていた「財政民主主義」の未来像を提示する重要な功績であり、財政学のみならず社会科学の広範な分野で高く評価されている。以上の理由により、選考委員会は同氏を若手研究者奨励賞の受賞者として全会一致で決定した。